

○○上伊那

令和4年6月29日

子どもを育てる大切な教育環境

伊那養護学校長の原潤です。本年度より伊那養護学校にお世話になっております。

私事となりますが、私は平成30年度、そして令和元年度と伊那養護学校で教頭として勤務させていただいておりました。令和元年度3学期の緊急事態宣言での休校により、子どもたちにお礼ができないまま人事異動となり、「子どもたちは元気でやっているかな？」といつも気になっていましたが、本年度の人事異動で再び伊那養護学校に勤務することになり、子どもたちや保護者の皆様、先生方に再会できたことを心から嬉しく感じております。それと同時に、先生方と力を合わせ伊那養護学校そして上伊那の子どもたちのために、温かい教育環境を築いていきたいなと思っております。

伊那養護学校では4月7日に入学式、8日に一学期始業式を実施しました。私も子どもたちとの再会にワクワクしていましたが、多くの子どもたちが、「あれっ原潤先生がいる!」、「先生、元気でしたか」等、駆け寄って話をしてくれてとても嬉しく感じました。そんな中、高等部1年の男子生徒が、「先生、僕が小学部の時に、いっしょにバスまで歩いてくれてありがとう」とお礼を言ってくれました。

その生徒は小6の時に様々な事情から家庭で学校まで送迎ができなくなり、学校が大好きな彼にどう登校してもらえばよいかを関係者会議で相談を繰り返し、「家からバス停まで一人で歩いて、スクールバスで登校する」という方向で支援をさせていただいた生徒です。安全に歩くコースを設定したり、地域の皆様にも安全確保を依頼したりし、バス停までまずは職員といっしょに歩く練習が始まりました。

私もその練習に参加し、バス停までいっしょに歩きました。家からバス停までコースや危険箇所を確認しながら30分いっしょに歩きます。少し不安そうな彼に、「今日もいっしょにがんばろうね」「寒くない?」「今日もコースを間違えないで歩いているね。すごいね」と、できるだけ温かい言葉をかけてはみるものの彼は何も話してくれませんでした。それどころか歩くスピードを速めて、私よりも先に行ってしまう。練習を繰り返し、彼は一人で安全にバス停まで歩くことができるようになり目標は達成しましたが、私個人としては、「いっしょに歩くのはイヤだったかな・・・」と少し気になっていました。

それから4年後の彼との再会での最初の一言が、「先生、僕が小学部の時に、いっしょにバスまで歩いてくれてありがとう」になるとは・・・喜びや驚きと同時に、子どもはいっしょにいる大人（教師）のことをよく見て、ずっと覚えてくれているのだなと実感しました。

阿部利彦、赤坂真二、川上康則、松久真実著『人的環境のユニバーサルデザイン』（東洋館出版社2019）に次のことが書かれています。

教師は一日何回も子どもたちに声をかけます。その言葉が好意に満ちているか悪意に満ちているかで、教室の雰囲気は180度変わります。教師が悪意に満ちた語り掛けをしていると、ギスギスした冷たい人間関係が定着してきます。反対に教師が好意に満ちた語り掛けをしているクラスでは、子どもたち同士にも少しずつ好意が育ち、温かい雰囲気や友達を助け合う雰囲気が育っていきます。

「目の前にいる子どもたちに私はどう見えているのか」「私の言葉は子どもたちにどう伝わっているのか」など、子どもを育てる大人（教師）としての在り方を常に見つめていくことが大切です。特別支援教育に関わる様々な研修から「指導方法」や「障がいの理解」等の専門性の向上に余念がありませんが、その基となる私たち大人（教師）の「どの子ども大切にしたい」という温かさも、子どもを育てる大切な教育環境であることを忘れてはならないと、私も自戒し続けたいと思います。

かみとくれん会長 原 潤（伊那養護学校）

